

生活

林芙美子

青空文庫

なににこがれて書くうたぞ

一時にひらくうめすもも

すももの蒼さ身にあびて

田舎暮らしのやすらかさ

私はこのうたが好きで、毎日この室生むろうさんのうたを唱歌のようにうたう。「なににこがれて書くうたぞ」全く、このうたの通り、私はなににこがれていてもなく、夜更ふけて、ほとんど毎日机に向っている。そうして、やくざなその日暮らしの小説を書いている。夕御飯が済んで、小さい女中と二人で、油ものは油もの、茶飲み茶碗は茶飲み茶碗と、あれこれと近所の活動写真の話などをしながらかたづけものをして、剪きりばな花に水を替えてやっている、もうその頃はたいい八時が過ぎている。三ツの夕刊を手にして、二階の書齋へあがつて行くと、火鉢の火がおとろえている。炭をつぎ、鉄てつびん瓶をかけて、湯のわくあいだ、私は三ツの夕刊に眼をとおすのだ。うちでとっているのは、朝日新聞、日日新聞、読売新聞の三ツで、まず眼をとおすのは、芝居や活動の広告のようなものだ。女の心があ

る、行つてみたいなど思う。永遠の誓いと云うのがある、みんな観に行きたいと思いがら、その広告が場末ばすえの小舎こやにかかるまで行けないでしまうことがたびたびなのだ。

広告を読み終ると三面記事を読む。その三面記事も一番下の小さい欄から読んでゆく。三つの新聞に、同じような事が書いてあつても、どれも違う記事のように読めて面白くて仕方がない。政治欄はめつたに読まない。だから私は、小学生よりも政治の事を知らない。—— いったつたかも、日日新聞から、議会と云うものを観みせて貰もらつた。入口では人の懐ふところへまで手を入れて調べる人がいたり、場内へ這はい入ると、四圍あたりの空気が臭くて、じつとしていられなかった。真下に視下みおろす議場では、居睡いねむりをしている人や、肩を怖おそからせてつかみあつている人たちがいた。それが議員と云う人たちなそうで、もう吃驚びつくりしてしまつて、それきりな気持ちになつてしまつてゐる。

ひととおり新聞を読み終ると、ちようど鉄瓶の湯が沸わき始める。もう、この時間が私には天国のよう、眼鏡めがねに息をかけてやり、なめし皮で球を綺麗にみがく。そうして茶を淹いれ、机の上の色々なものに触れてみる。「御健在か」と、そう訊きいてみる気持ちなのだ。ペンペンは万年筆を使つてゐる。インキは丸善のアテナインキ。三合位さんごうはいつてゐる大きい瓶びんのを買つて来て、愉たのしみに器うつわへうつしてつかう。二年位あるような気がする。原稿用紙

の前には小さい手鏡を置いて、時々舌を出したり、眼をぐるぐるまわして遊ぶ。だけど、長いものを書き始めると、この鏡は邪魔になって、いつも寢床ねとこの上へほうり投げてしまう。机の上には、何だか知らないけれども雑誌と本でいっぱいになって、ろくろく花を置くことも出来ない。唐詩選の岩波本がぼろぼろになって、机の上のどこかに載っている。

九時になっても、お茶を飲んで呆ぼんやりしている。昔の日記を出したりして読む。妙に感心してみたり、妙にくだらなく思ったりする。心の遊びが大変なもので、色々な人たちの顔や心を自由に身につけてみる。あの人と夫婦になってみたいなど思うひとがあつて、小説を書く前は、他愛のないそんな心の遊びが多い。——十時頃になると、家中のひとたちがおやすみを云いあう。皆が床へつくと、私が怖がりやだから、家中の鍵を見てまわり、台所で夜食の用意をして、それを二階へ持つてあがる。塩昆布と鯉節からだの削ったのがあれば私は大変機嫌がいいのだ。この頃は寒いので夜を更ふかしているとからだこたえて来て仕方がない。なににこがれて書くうたぞ、でその日暮らし故、それに、やつぱり書くことに苦しくとも愉しいので机の前に坐つてしまふ。腰をかける椅子なので、寒くなると、私は椅子の上に何時いつか坐つて書いている。書いていて一番厭いやなのは、あふれるような気持ちでありながら、字引を引いて一字の上に何時までも停滞していることが、一番なさけない。私の

字引は、学生自習辞典と云うので、これは、私が四国の高松をうろろしていた時に七拾五錢で買ったもの、もう、ぼろぼろになつてしまつてゐる。何度字引を買つても、結局これが楽なので、字が足りないけれどこれを使つてゐる。本當に、考えて見れば田舎いなかの女学生みたいな生活だけれども、こうして、私の生活を何か書けと云われると、私は、ぱつとした暮らしでもない自分のこの頃に、何とない、おかしなものを感じ始めているのだ。

雨。

今日もまた雨なり。膝小僧を出して『彼女の控帳』をどうとう書きあげる。二十七枚

『新潮』へ送る。駄菓子ひょうたんうりを拾錢買つて来て一人でたべた。小かぶと瓢箪ひょうたんうり瓜を漬けてみる。二、三日したらうまいだろう。母より手紙、頭が痛い。——十二日

雨。

へとへとだ。くだらなく徹夜して読書。——財産三拾七錢はかなや。夜、紫とらなる寅おの花拾錢、シオン五錢買つて来る。雨に濡ぬれて犬と歩む。よき散歩なり。フミキリの雨、夜の雨、青く光つて濡れて走る郊外電車、きわめてこころよし。——十三日

これは三年前の秋の日記だけれども、何かが恋をでもしているような子供っぽい日記だ。いまは、何も彼かも愕おどろきのない生活で、とても、此様な日記はかけない。——昔は、肉親た

ちがちりぢりに遠く散つていて孤独であつたせいか、燃えあがるような気持ちだつたけれども、いまは私の家にみんな集つて来ているので、時々辛いなと思う時がある。——昼間は客が多いので、仕事はたいい夜中だけれど、夜中の仕事は私には少々辛くなつて来た。翌^{あく}る日はおぼけのような顔で、ふためとは見られない。寢床へ這入るのが四時頃、七時には眼が覚めてしまう。家の近くに辻山病院と云うのがある。古くからの知りあいで、私はここでこの頃^{ねむ}睡り薬をつくつて貰つている。疲れると、その睡り薬をのんで、昼間でもベッドに横になる。ベッドと云つても、寄宿舎にあるような小さいベッドなので、寢心地が何となく悪く、すぐ眼が覚めるのもベッドのせいかも知れないと思つている。朝、六時か七時には、どんなに寒くても起きあがり、ひととおり新聞を読むのが愉しみ。文芸欄を読み、家庭欄を読み、それから政治面の写真だけを見る。それでおしまい、三面記事を朝読むのは怖いから読まない。一日厭な思いをするから、たいいてい、昼すぎにちよいちよいのぞくことにしている。

徹夜の仕事はろくなものは書けないのだけれども、どうしても夜になって、「ああ」とくたびれてしまうのだ。私だけの客でなく、家のひとたちの客も見える。おかずごしらえ、下着の洗濯、これでなかなか楽な生きかたではない。年齢^{とし}をとつた女中をおくことも時に

考えるけれども、いまの女中は十三の時に来て三年いる。私の邪魔にならないので、何が不自由でも、それが一番幸せだと思つてゐる。第一、女中がいてくれるなんて、マノン・レスコオの中の何かの一節にあつたけれども、なりあがり者の私としては、はずかしい位なのだ。しかも三年もいてくれている。

私は、ひとにはなかなか腹をたてないけれども、家ではよく腹をたてて自分で泣きたくなる。その気持ちはどこへも持つてゆきようがないので、机の前に坐り、呆ぼんやりしてゐる。煙草たばこはバツトを四、五本吸う。昔、好きなひとがあつた頃は、そのひとが煙草がきらいで吸わなかつたけれども、いまはそのひとと何でもなくなつたので、平気で煙草を吸うようになつてしまつた。やけになる気持ちは大変きもちがいい。私は何度もやけになつて、随分むしやくしやくした昔だつたけれども、この頃は日向ひなたぼっこみみたいだ。——小説の話は大きらい、説明や批評が少しも出来ないからだろう。ほら、お日様みたいな小説よ位の説明ならば指で丸をつくつて、「ほら、こんなに円満なのさア」で、「ああそうか」と受取つて貰うより仕方がないのだ。時々埃ほこりを叩くような批評を貰う時がある。辛いなど思ふけれども、それで、シゲキを受けることもひととちばいのせいか、すっかり呆ぼんやりしてしまつて、腐ふつた、魚ふとんみたいに、二、三日蒲団をかぶつて寝てしまふ。自分の作品がよくな

いからだ。一番、自分が知っているから一時はゆきばがなくなるけれども、机の前に坐り、また、こつこつ何か書き始める。私はこれが宗教だと云うようなものがあるとすれば、ただ、こつこつ書いている。その三昧境さんまいきょうにあるような気がする。厭な言葉だけでも、私は万年文学少女なのでもあろう。

つい四、五日前、税務所のお役人が来た。お役人と云うと、胸がどきどきして、ちょうど昼食時じつきだったけれども、御飯が咽喉のどへ通らなかつた。私は税金を払い始めてちようど四年になるけれども、蔭では実際辛いなと思つたことがたびたびだった。収入が拾円の時が三、四度あつたり、ちよつと旅をすると、その収入が止つたりするのに、税金は私にとつて案外立派すぎた。今度も、税金の値上げだったけれども、「年収四千円はありますでしよう」と云われたのは誰のことかと吃驚びっくりしてしまつた。よく運んで二百円、悪くいつて九拾円、平均百五拾円あつたら、ナムアミダブツと月の瀬を越すことが出来る。

「吉屋信子よしやのぶこさんの税金は下手な実業家以上です」と、税務所のお役人が云われたけれども、私は吃驚しているきりで何とも話しようがなかつた。一、二枚のものを書いても林芙美子だし、かりそめに、ゴシツプに林芙美子の名前が出ていても、それをいっしょくたにして

あれこれ云われるのでは立つ瀬がないから、「どうぞ雑誌社や新聞社で、私が稿料をいつたいいくら貰っているかきいてみて下さい」と云うより仕方がない。吉屋さんは先輩でブンヤも違う。「あなたは文学はお好きでいらっしやいますか」とたずねると、お役人は、学生の頃はそれでもちよいちよい読みましたが、いまは法律をやっていますと云うことだった。感じのいいお役人であったが、年収四千元は困ったことだと思つた。純文学をやっているひとつて、案外、派手のようだけれど貧乏で、月五拾円あるひとは、新進作家の方でしょうと云うと、そうですかねえと感心していた。

「その純文学の方は誰が一番収入があるのでしよう」

そんなことも訊かれたが、たいてい名前は派手でも、私と似たりよつたりでしょうと威張つて云うより仕方がない。——十年前から一度も値上げにならない原稿料で、私は割合平気でししとしている。税金も、吉屋さん位になりたいのは山々だけれども、これは生れかわつて来ないことには、とうてい駄目なことだろう。「だって朝日新聞にお書きになつたでしょう」とも、話が出たが、一万円とまちがわれたのでは浮ぶ瀬もないと思つた。二十七回書いても新聞小説だし、二百回書いても新聞小説なのだから困つてしまふ。一日胸がどきどきして困つた。女学校へやつている姪めいの顔を見ても腹がたつて、「税金が増える

のよ、怖くないか」と云うと、怖いと同情してくれた。

「いったい、税金って何に使うか知ってる？」と十五歳の姪に尋ねると、「ほら、だいみよ大旅行うつてあるじゃない、あんなのじゃないの」と云う答えだった。そうかなアと思つた。

——私は、草花が大好き、花ならば何でもいい。冬の剪花は、手入れがいいので三週間位もたせる事がある。花は枯れてからも風情ふせいのあるもので、曾宮そみやいちねん一念氏が、よく枯れた花を描かれるけれども、枯れた花の美しさは、ほのぼの仄々としていて旅愁がある。女の枯れたのも、こんなに風情があるといいなと思う。私は三十二歳になつたけれども、同年輩の男の友人たちは、みずみずしくつてまだ青年だ。たけだりんたろう武田麟太郎さん、ほりたつお堀辰雄さん、ながいたつお永井龍男さん、いずれも花菖蒲はなあやめだ。だけど、女の青春はどうも短かすぎる。——いま、せまい私の机の上に、小さいコップが乗っている。マアガレットや、菜の花や、矢車草や、カアネイションが一本ずつ差してあるが、それに灯火あかりのあたっている風情は、花つて本当に美しいものだと見とれてしまう。今度生れかわる時は花になって来たいものだ。花どだつたら三白草くだみだつていい。

花が好き、その他には、一ヶ月のうち二、三度は汽車へ乗っている。旅が好きで仕方が

ない。旅の遠さは平気で、歩くことがとても楽しい。この一月は志賀高原へスキーに行った。丸山ヒュッテに泊ったが、幸い紅一点で、雪の山上で私はまるで少女のようのにのびのびとしていた。スキーは下手だけれども、暴力的なあの雪を蹴ってゆく気持ちが好きだ。自然と自分とに距離がなくなる。十二沢のゲレンデで、私位よく、勇ましく転んだ者はな
いと云うことであつた。温泉へ這入ると、軀じゆう青や紫のあざだらけになつていて、さすがに転びスキーがはずかしかつた。

二月は、伊豆の古奈へ行つた。丹那トンネルは初めてなので、熱海を出るときから嬉しくて仕方がなかつた。八分位かかると聞いたけれども、随分ながいトンネルのような気がした。

熱海の海の色は、ナポリみたいな色をしている。温くて呆んやりしていて、磯はマチスの絵にあるような渚だ。——古奈では白石館と云うのに泊つた。ここでは芸者が一時間壺
円で、淋しかつたので、はと云うひとに三時間ほどいて貰つた。

三月は上州の方へ行つて見たい。旅をしていると、生れて来た幸せを感じるほどだ。家人は、弁当が食べたいからだろうと云う。私は汽車へ乗ると弁当をよく買う。木の匂いがして御飯もおかずもおいしい。汽車へ乗っていると、日頃の倦き倦きしていることが、

いつぺんに吹き飛んでしまつて、東京へ帰る時などは、
 うなそんな気持ちになり済ましているのだ。
 田舎女いなかおんなが初めて上京して来るよ

一時が打つた

誰もよく眠つたのだろう

五万里も先きにある雪崩なだれのような寝息がきこえる

二時になつても三時になつても

私の机の上は真白いままだ

四時が打つと

炭籠すみかごに炭がなくなる

私は雨戸をあけて納屋なやへ炭を取りに行く

寒くて凍りそうだけれども

字を書いている仕事よりも

炭をつまんでいる方がはるかに愉しい

飼われた鶯が、どこかで啼きはじめる

これは、私の散文だけれども、夜明けに、こんな気持ちを味わうのはたびたびのことだ。炭籠をさげて裏へ出て行くと、寒くて震えあがってしまう。だけど軍手をはめて、がらがらと炭俵をゆすぶって、炭を一つ一つとつまんでいる時は、私が女のせいかな、やっぱり嬉しい本業へかえったようで、楽々とした気持ちなのだ。

夜明けになると、どんなに寒くても鶯が一番早く啼いてくれる。どの家で飼っているのか知らないけれども、屋根の上が煙ったように明るくなるとすぐ鶯が啼き、牛乳屋の車の音が浸み透るよういきこえて来る。牛乳は二本取っている。母親と私がごくごく飲むのだ。牛乳配達や、新聞配達、郵便配達、寒い時は、気の毒になってしまう。夜明けの景色はいいけれども、徹夜をすると、私はまるで皮でもかぶっているように気色が悪い。

朝御飯はたいてい牛乳。本当に御飯をたべるのが九時頃。御飯は女中が焚き、味噌汁は私が焚く。幸せだと思う。仕事が忙がしくなつて、台所へ二、三日出ないと、皆、抜けた顔をしている。私は料理がうまい。楽屋では実も蓋もないが、料理はやっていて面白い。

昼間は仕事が出来ないので困る。昼間、仕事が出来ると、近眼ちかめにも大変いいのだけれども、昼間はひとがみんな起きているから、つい何もしないで遊んでしまう。忙がしくって困つても、友達が来ると遊んでしまう。友達が来てくれることは何よりもうれしい。日に十人位は色々の人が見える。疲れると勝手に横になつて眠る。

家へ来るひとは、男のひとたちが多い。大変シゲキがある。——酒は飲まない。虫歯が出来たし、胃が弱くなつて、深酒ふかざけをすると、翌日あつくは一日台なしになつてしまう。それでもすらすら仕事の出来た後は、どんな無理なことも「はいはい」と承知してあげて、酒も愉しく上手に飲む。仕事の後の酒は吾われながらおいしい。酒は盃のねぼる酒がきらい。食べものは何でもたべるけれどもまぐろのお刺身が困る。好きなのはこのわたで熱い御飯だけれど、このわたしは高くて困る。お金がはいつたら鼻血が出るほどたたてみたいと思う。からすみも好きだけれども、これも高い。うにはそんなに好きじゃない。塩魚が好き、塩魚を見ると小説を書きたくなる。何か雰囲気があるから好きだ。巴里パリには上手に干した塩魚がなかった。

芝居も活動も子供の時からきらい。母親と女中だけは近所の活動へこまめに出かけて行く。——絵を描くことは私の仕事の二番目で、石油の中で、固くなつている筆を洗つてい

る時は、むずかしい顔をしたことがない。小林秀雄、永井龍男両氏に、絵をあげる約束をしているので、その絵のことを考えていることは何とも云えない。私は静物はあまりうまくない。素人にしてはのイキだそうだけれども、その辺がちやうど面白いところで、描いていると、美しい色をつかつている絵描きがうらやましくなつて来る。

マチス、モジリアニが好きで、色刷りを時々出して眺めている。この間は、萬鉄五郎氏の絵を二枚もとめた。萬さんのような仕事をしたものだ、その絵を見るたびにシゲキさせられるのだけれども、私はなまけもので仕方がない。自分の行末、自分の書くもの、皆々よく判っているけれども、雨か風でもきびしくあたつてこないことには、このなまけものは、なかなか腰をあげそうにもないのだ。今年は何も書きたくない。私はいま世界地図を拡げて、印度へ行く事を計画している。秋頃には、歐洲へ行った時のように、気軽に船出したいものだと思つている。何度でも初旅のような気持ちで、私は随分方々へ行つた。貯つていようと思つて訊くひともあるが、貯つていようと思つて宿屋の勘定書き位で、全くもつて、その日暮らしなのである。云えば、雌山羊の乳をしぼれば、他の者が篩をその下に差し出していると云う、そんなはかない生活なので、軀工合でも悪くなると、あれこれと考えるのだが、まあ、米の飯とお天道様はついてまわるだろつと思つている。月

黒うして雁飛ぶこと高しで、どんなみじめな日が来ても、元々裸身ひとつ故、方法はどのようなにもなるだろう。

頃日、机に向つてしていると、矢折れ刀つきた落莫たる気持ちだけれども、それは、自分で這入りいい処をただがさがさと摸索していたに過ぎないのだ。唯一の目的は、まだ遠くにあるのだけれども、所帯を持つてしていると、今日は今日ではで呆んやり暮らして、洗濯ごとや、台所ごとの地帯にいやに安住して眼をほそくしている。

私は「清水の如く特殊の味なし」の仕事を念願しているのだけれども、手踊りがめだつ、嘘やつくりがめだつて、何とも苦しくて仕方がない。女と云うものは力が足りないのかも知れぬ。癖の滌らないことは勉強が足りないのだろうけれども、私は、前にも云つたとおり、こんな日向ぼっこをしているような文化生活は困ってしまうのだ。男の作家たちに拮抗してゆこうなどとはつゆ思わなければ、せめて、もう一段背のびをしてみたいと思つてゐる。——室生さんのこの頃のお仕事の逞しいのに愕いている。武田さんも随分あぶらがのつてゐる。偉いと思う。みんな歴史を持つてゐる人たちだけれども、よく疲れられないものと、その苦しみを考えるのだ。私は纔かに七、八年の歴史しか持つてゐない。それも、自ら踊りを踊る仕事で、苦味いことだらけだ。

清水のように特殊な味のない仕事をするのはこれからだと自ら反省している。

私には、深く行き交う友達がない。私はほとんど人を尋ねて行ったことがない。町でたれかれに逢うだけのものです、人の家を訪問することはまれだ。自分に倚り添うてくれるものは、結局自分自身なのであろう。——散歩も段々おつくうになつてしまった。ひまがあるとベッドに横たわつて呆んやりしている。月のうち五、六ぺん、神田の古本屋、本郷の古本屋をひやかして歩く。とても愉しい散歩のひとつだ。割合、不勉強で本代はいまのところそんなにかからない。拾円もあれば我まんしている。昔は、随分飢えたような生活だったので、少しばかり楽になると、私は手におえない浪費者で、何でも買つてみたくて、なりあがり者の氣質を多分にそなえているのだ。なりあがりの陽気者のくせに、厭に孤独で、孤独のなかの自分にだけは徹しているので、友達がなくても、そんなに苦しくはない。女だから、女の友達をとお考えるのだけれども、自分が足りないのか、向うが私を厭な奴だと思ふのか、のぼせあがるようなひともない。男の友達は心に良薬、口に毒薬で、なかなかシゲキして貰える。

詩を書くこと、絵を描くこと、いずれも好きで、自分の仕事のなかに、詩や絵の類似品を持つていることが、私の仕事の味噌だけれども、作家には、色々な波があつてもいいと

思う。今年は少し休息して、遠くへ行かれるものなら、ひとりでこつこつ目的もなく歩いて来たいと思っている。

青空文庫情報

底本：「林芙美子随筆集」岩波文庫、岩波書店

2003（平成15）年2月14日第1刷発行

2003（平成15）年3月5日第2刷発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号586）を、大振りにつくっています。

入力：林 幸雄

校正：noriko saito

2004年8月10日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

生活

林芙美子

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>